

# 海と生きる

## 一 気仙沼における番屋避難路の提案 一



### Keywords

災害復興 地域再生 防災  
まちづくり 防災まちづくり

DZ18015 佐藤 夏野

### 1. はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災は地震による津波を引き起こし、東北地方沿岸部を中心に甚大な影響を及ぼした。私自身、地元である宮城県気仙沼市で被害を受けた。被災経験から、様々な被災地の課題を建築を通じて解決できないかと考えた。

### 2. 研究背景

#### 2.1 東日本大震災による影響

東日本大震災の津波によって漁港周辺にあった住宅や店が流され、漁港では船の重油が水面で炎上するなど甚大な被害を受けた。震災から10年が経ち、市場や工場など漁港周辺の建物は復旧されたが、震災前の人の流れはまだ戻っていない。

また、多くの沿岸部は防潮堤が建てられ、高い壁の防潮堤によってまちと海、人と遮断された地域が多く見られる。

#### 2.2 番屋

漁港には漁師たちが海に出る支度をしたり、休憩をとったりする、漁の拠点となる番屋と呼ばれる場所がある。番屋は漁業関係者が集う場所であり、漁業を中心とした地域コミュニティの拠点であった。しかし、東日本大震災の津波によって漁業そのものが甚大な被害を受け、同時に無数の番屋が流出した。漁港や市場などは早期に復旧・復興したが、仕事に直接関係のない番屋は公的補助の対象になりにくく、漁港から番屋の姿は消えたままである。そのため現在の漁師は、漁に出るまで車の中で待機することが多く、以前のような番屋を通じて情報交換などの交流の機会が少なくなっている。

### 3. 研究目的

気仙沼市港町は、広範囲が災害危険区域に指定されているため今後の災害に備えることが必要である。この課題に対し、津波避難路を整備し災害時の拠点となる新たな番屋を設けることで災害に強く、また、漁業関係者だけでなく地域住民や観光客なども利用できるようにすることで、誰もが集える場所を目指す。

### 4. 対象敷地

対象敷地は気仙沼市港町とする。この地区は出港岸壁のため、日本全国から漁船が集まり、漁船員の乗り込みや出港準備が行われるところである。

#### 4.1 内湾地区の防潮堤<sup>1)</sup>

気仙沼内湾地区は、わずか500メートルほどの区間で、「フラップゲート式」「施設一体化」「無堤」という3種類の防潮堤を建設された被災地の中でも珍しい地区である。

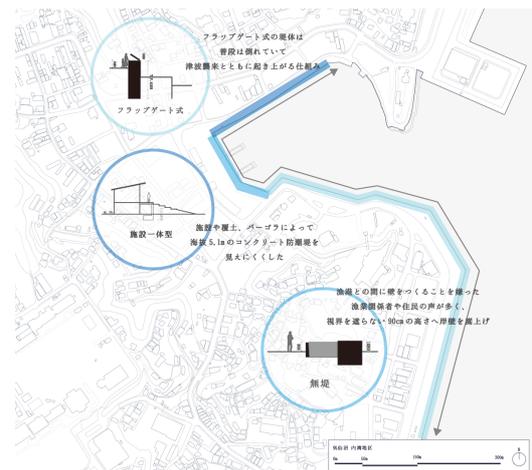


図1 内湾地区の3種類の防潮堤

地区の半分以上が「無堤」を選択をした。このエリアでは当初海拔5メートルの防潮堤建設が計画されていたが、漁船関連の事業所が多く、漁港との間に壁をつくることを嫌った漁業関係者や住民からの反対の声が多かったため、計画は撤回され、無堤化され岸壁の高さを90cm嵩上げした。

#### 4.2 災害危険区域

対象敷地である港町は無堤の津波浸水地であるため、災害危険区域に指定されている。災害危険区域では、児童福祉施設や老人福祉施設などの建築が禁止されている。居住用途の建物や寄宿舍、宿泊施設なども原則として建築が禁止されているが、これらの建物については構造等

の条件を満たす場合には建設が認められている。<sup>2)</sup>

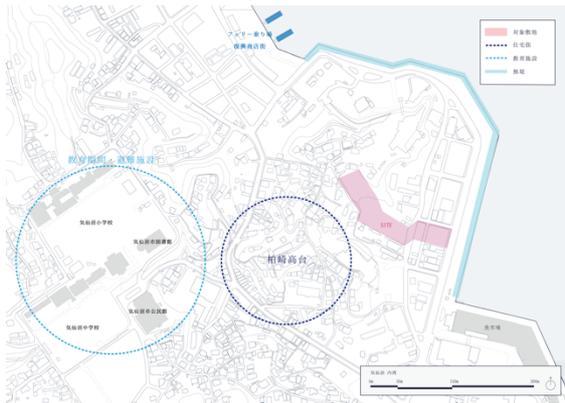


図2 対象敷地と周辺状況

### 4.3 津波避難路

対象敷地周辺は低地の海と高台の住宅地や小学校、公民館などの避難所が隣接しており、今後の災害に備える機能が求められる地域である。また、対象敷地に隣接する緊急避難場所の柏崎高台までの避難路は舗装されておらず、道幅も狭く、急勾配の坂であるため、高齢者や幼児などの災害弱者でも使いやすいバリアフリー化された避難路が必要である。

## 5 計画概要

### 5.1 設計趣旨

#### (1) みんなの番屋

休憩所や食堂といった、従来の番屋としての機能だけでなく、銭湯などの機能も持たせることで、地域住民や観光客も利用することのできる、地域に開いた番屋を提案する。

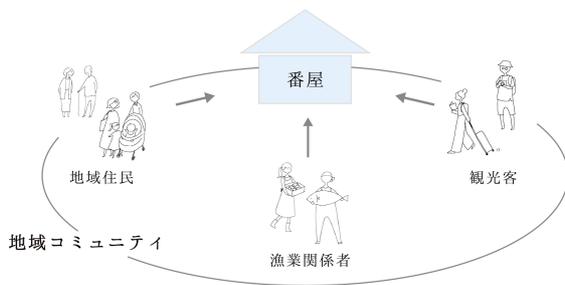


図3 番屋を核にした地域コミュニティ

#### (2) 日常時と災害時の使われ方

普段は銭湯として利用し、災害時には入浴支援を行い、宿泊所では普段は観光客や漁業関係者が利用し、災害時にはみなし仮設として利用する。避難路を整備し、日常的に使う道としても機能させ、災害時にはスムーズな避難を促す。日常利用しながら災害リスクを受け入れる建築を提案する。

#### (3) 災害を受け入れる

1階レベルは予想浸水深を満たすため、オープンスペースの広場とし、L1津波高さ（数十年から百数十年に一度の津波）であるT.P.+5000に対応する公園とする。日常時→災害発生→復旧→復興→日常時といったサイクルをあらかじめ想定し、災害を見越した設計を提案する。

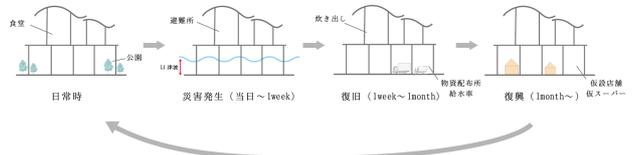


図4 日常時～復興サイクル

### 5.2 プログラム

敷地面積：6,900㎡、延床面積：4800㎡、建築面積：5200㎡（コミュニティーセンター：840㎡、銭湯：750㎡、宿泊所：450㎡、商店街：600㎡、食堂：220㎡、広場：780㎡）

### 5.3 計画断面概念図

住宅街であり、避難場所指定されている柏崎高台まで約12メートルの高さをスロープの津波避難路で緩やかに登る。踊り場にあたるスラブに用途を置き、普段から避難路を利用することで災害時にスムーズに避難することができる。

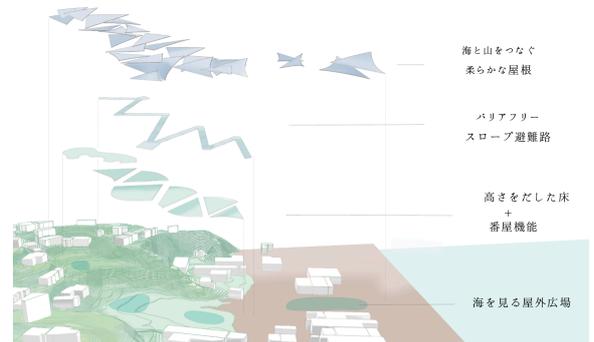


図5 構成ダイアグラム

## 6. 終わりに

気仙沼の人々は海を生業とし、海的美しさに魅せられ、海が生活の中心だった。しかし、東日本大震災を受け自然の脅威がもたらした被害に行き場のない怒りや悲しみを抱く人が多い。震災から10年が経ち、少しずつ立ち上がる人が増えてきた現在、高台移転や防潮堤建設などで海と離れてしまった人に建築を通して少しでもまた海を好きになってもらいたい。

### 参考文献

- 1) 今川悟『学べる復興ガイド』  
<https://imakawa.net/report/5962.html>
- 2) 気仙沼市災害危険区域の指定等について(気仙沼市)  
<http://www.mori-umi.org/wp-content/uploads/2013/12/3saigaikikennkuiki.pdf>